

海が見える丘で（第二部）

中沢 央

（前回までのあらすじ）

茨城の中央部分に位置する街、ひたちなかで、魔物が
出没するようになった。魔物討伐有志に志願したエルダ
ーは、仲間たちと共に、魔物討伐の旅を始めるのだった。

（登場人物）

・エルダー・ケルデイル（十八）

ひたちなかに来るのは初めての冒険者。彼女がいたこ
とはない。

・オーヴァル・クレイグ（二十九）

水戸の高等学校の教師。美男子。職場に爆破予告が出
されないか日々考えている。

・ファルネウス・ヴィクトー（二十四）

女性口調の男性。冒険者。普段から化粧をしているが、
すっぴんも美しいかどうかは誰も知らない。

・アルレシャ・イグザレルト（四十二）

踊り子の男性、本職はひたちなかの役人。筋肉は裏切
らない、が座右の銘。

・ユリアン・コルビュジェ（二十二）

ひたちなかの役人の女性。早く出世してお茶くみの習
慣を廃止したいと思っている。

・フィニア・ニコ（十八）

ザサ教の神官。好きな飲み物は紅茶。

・トール・ス・オルトリンデ（二十一）

王立茨城学院三年生で長髪の美男子。予告は彼の母校
に出されると誰が予想できただろうか。

魔物が人里に現れ始めたのは、何者かの仕業かもしれ
ない。
エルダーたちの間に、緊張が走る。

仲間たちの反応を見て、オーヴァルは努めて平静に言
った。

「まあ、あくまで私の推測だが」

しかし、一度生まれた懸念は簡単に拭いきれない。エ
ルダーたちから厳しい表情が消えることはなかった。

オーヴァルは後悔の念に駆られた。

確証も無いのに、迂闊に推測など話すべきではなかつ
た。

「一つ良いかしら？」

オーヴァルはファルネウスに視線を向けた。

「何だい？」

「思わず阿字ヶ浦に来ちゃったけど、そもそも那珂湊の魔物の数が増えてきているから、那珂湊に来たのよね？早く那珂湊に戻った方が良いんじゃない？」

「そうだった。すっかり忘れてた。このままでは、那珂湊へ海鮮丼食べに行っただけになってしまう。」

「え？ 何？ そうだったんですか？」

那珂湊で仲間になったトーレンスは、頓狂な声をあげた。

「交易所からまっすぐ漁港に行ったから、海鮮丼食べに来たのかと……」

「そう思われてたのか！」

アルレシヤは不本意だと言わんばかりに、眉をしかめたが、トーレンスの言うことは、もつともだ。

「皆、那珂湊へ戻ろう」

アルレシヤの言葉に異を唱える者はいなかった。

大ちゃん通りを進み、那珂湊へ戻る途中も、魔物は現れた。

干し芋のような形をした、ドライポテトだ。

「皆さんと会う前に、一応戦ってみたんですよ」

トーレンスは足を踏み込むと、槍を突きつけた。力強

く突きつけられた槍は、魔物を貫き、ドライポテトは消滅した。

やはり、槍投げと実戦で使う槍は、扱い方が違うためか、トーレンスの槍捌きは、少々ぎこちなかった。

しかし、日頃から鍛えているのか、槍を突く力は強そうだった。経験を積みれば、優秀な戦力になりそうだ。

「なかなか力がありそうだな。普段から鍛えてるのか？」
アルレシヤの問いに、トーレンスは笑顔で答えた。二十を超えるはずだが、笑みを浮かべると少年のような面影がある。

「はい。部活だけじゃなく、家でもトレーニングしてますよ」

ユリアンは焦りを感じた。自分だけ戦力にならないのではないかと。

「私も頑張らないと」

「ユリアン、俺たちは魔物を倒してきたんじゃない、魔物討伐志願者の監視のために来たようなものだ、無理をするな」

アルレシヤは部下を励ました。

「でも、せっかくレイピアも買ったわけだし……私だけ足手まといになりたくないし」

「じゃあ、経験積んだほうが自分の身も守れるだろうし、弱そうな魔物から倒してみるっていうのはどう？」

エルダーの提案に、アルレシヤも頷いた。

「それもそうだな。ドライポテトでも出てきたら戦ってみる。俺たちも援護するから」

干し芋推進課に所属する彼女に、ドライポテトを倒せと言う上司。一見酷な命令を出しているようだが、彼女は干し芋が好きじゃなかった。辞令を渡された時、ユリアンは自分の耳を疑った。干し芋は、苦手と言っても良いぐらいである。

干し芋に思い入れなど露ほども無いユリアンにとって、ドライポテトと戦うのに何ら問題は無かった。

ドライポテトが出るなり、ユリアンはレイピアを取り出した。

レイピアで戦ったことはなく、フェンシング部の経験しかないため、必然的に戦う姿勢も部活に倣ったものになる。

にじり寄るように、細々とドライポテトに近づく。

ドライポテトが体当たりしてきた瞬間に、ユリアンは腕を伸ばし、レイピアで魔物を突いた。

レイピアは、部活で使っていたフルールよりも重く、しならない。

フェンシング部を引退して五年。現役の頃より衰えているが、なかなか素早く動けたと思う。

ユリアンが感慨にふける間も無く、ドライポテトが反撃してくる。

「シャイン！」

ドライポテトの反撃がユリアンに当たるより前に、フイニアの光魔法が放たれた。

光の柱に貫かれ、ドライポテトは消滅した。

一息つくまもなく、今度は納豆を纏った狼が現れた。

「出たわね、ナットウルフ」

ファルネウスは一度、ナットウルフに(精神的に)殺されている。

言わば、因縁の相手だ。

「消えなさい！」

ファルネウスが放った矢は、普段よりも綺麗な曲線を描き、ナットウルフを射抜いた。

ナットウルフは消滅した。

オーヴァルは魔導書を開いたまま、ため息をついた。

「しかし、キリがないな」

今までの比ではないくらい魔物の数が多い。倒しても倒しても、視界から魔物の姿が無くなることはない。

ファルネウスの顔が曇る。

「ここはまだ那珂湊じゃないはずなのに」

アルレシヤは不安を覚えた。那珂湊だけではなく、平磯の方にも魔物が押し寄せてきているのかもしれない。

「そうだな。平磯あたりか？」

平磯は阿字ヶ浦と那珂湊の間あたりに位置している。

「親玉みたいな倒せば雑魚たちも消える、ってことないかな？」

トールレンスは納得のいかない顔をしている。

「親玉？ そんなものいるのか？」

「そう言えば」

「ファルネウスは何かを思い出すように、顎に手を当てて考え込んだ。」

「東石川で戦ったあの強いヤツ、アイツを倒した後、東石川ではあまり魔物を見なかったような……」

「そう！ 俺が言いたいの、そういうことだよ」

「アルレシヤは魔物を短剣で切りつけながら、問いを口にした。」

「どういうことだ？」

「俺たち東石川で、すげー強い魔物倒したんだよ。勝田交易所の近くで戦ったんだけど、それから、役所に向かうまで、魔物をほとんど見てないんだよ」

「オーヴァルもエルダーが言いたいことが分かり、目を見開いた。」

「——確かにそうだ！」

「だから、ここでも親玉を倒せば、魔物の出現数も減るんじゃないかね？」

「じゃあ、親玉を探した方が良いでしょうね」

「フィンニアも親玉を倒すことに乗り気だ。」

「でも、親玉ってどこにいるんだ？」

「トールレンスの疑問は、仲間全員が考えていたことだ。」

「とりあえず、平磯、那珂湊周辺をくまなく探してみる

しかないんじゃないか？」

「エルダーは、攻撃してきた魔物を斬りつつ答えた。」

「そうだね。もしかしたら、道中見つかるかもしれないし、今は進むしかないな」

「オーヴァルはMPポーションを飲んだ。MPポーションを飲んだのは、彼がこの旅で死のうとすることを止めたからではない。仲間を、危機に晒さないようにするためだ。」

その時、青空を連想させるネモフィラのような、水色の花の姿をした魔物が現れた。

ネモヒラだ。

ネモヒラは花粉を吹きかけてきた。

咄嗟にエルダーは、腕で口と鼻を覆った。

「皆、口と鼻を覆え！」

しかし、覆うのが遅れたオーヴァルは、鼻から花粉を吸ってしまった。

「ふっ……クシヨン！」

「オーヴァルのくしゃみが止まらない。慌ててMPポーションが入った瓶のふたを閉めようとするも、くしゃみが止まらず、少しこぼれてしまった。」

「オーヴァルはくしゃみが収まった一瞬の隙で、悲鳴を上げた。」

「くしゃみが止まらない！」

「アルレシヤの目から涙が溢れ出ている。」

「目が痒い!!」

フィニアにいたっては、目を赤くしながら、くしゃみをしている。

エルダーはネモヒラを上下真つ二つに切り裂いた。ネモヒラを倒しても、フィニアたちのくしゃみは止まらない。

トーレンスは目を丸くしながら、呟いた。

「さっきの花粉には、くしゃみが止まらなくなる作用があるのか？」

ファルネウスは首を傾げる。

「でも、私も花粉を吸ったけど、何ともないわよ」

フィニアは鼻のむず痒さが収まった一瞬の隙に、魔法を詠唱した。

「レスト！」

しかし、一向に目の痒さは治らない。フィニアたちは苦しそうに目をこすり続けた。

結局、フィニアたちのくしゃみは、半刻もしないうちに治まった。

花粉を吸っても何も起こらない者、フィニアたちのようにくしゃみが止まらなくなる者の違いは分からないが、一部の者にとっては、ネモヒラは厄介な相手であるのは間違いない。

「今度ネモヒラが現れたら、直ちに焼き尽くそう」

オーヴァルは魔導書を持つ手に力を込めた。

その後も平磯を抜け、那珂湊にたどり着いた後も街中を歩いたが、親玉らしき魔物には出くわさなかった。

その日は、那珂湊の宿に宿泊することにした。数は多いが、那珂湊全域に魔物が出没している訳ではなく、今晩泊まる宿がある辺りは、まだ魔物が出没していない。

夕餉は宿屋近くの店で食べた。海鮮料理を中心に扱う店で、二食連続で海鮮丼を食べることになったのだが、海が無い栃木出身のトーレンスは嬉しそうだった。もちろん、エルダーも例外ではない。

夜も更け、周辺の酒場に人が集まってきている。

七人全員で泊まれるような大部屋は無いため、少人数に分かれて泊まることになった。

エルダーはトーレンスと同室だ。

「エルダーは成人してるよな？」

「ああ。今十八だよ」

「なら、これから飲みに行かぬ？」

そう言いながら笑うトーレンスは、少年のような表情をしていた。

「良いな！」

「あつ、でも奢りじゃないぜ。俺まだ学生だから金に余裕ないし」

「別に気にしないぜ。ユリアンたちも誘う？」

「もちろん。とりあえず仲間全員に声かけよう」

二人は宿の部屋を出た。

エルダーとトーレンスが泊まる部屋は二階にある。二人は他の仲間たちがあてがわれた部屋がある一階へ向かった。

一階の廊下を少し歩くと、見知った顔を見かけた。

「よお！ フィニア、ユリアン」

エルダーたちに気づいたユリアンは手を振った。

「どこか行くの？」

二人とも湯屋に行った帰りだろうか。金色の髪と、小麦色の髪がしつとりと濡れている。

「これから飲みに行こうって話になってるんだけど、二人とも来ないか？」

湯上りの香りが、エルダーの鼻に届いた。

ユリアンとはフィニアは顔を見合わせた。

「フィニアは成人してるよね？」

「はい。今十八です」

フィニアは同じ年だったのか。エルダーは、フィニアに親近感を覚えた。

「ちなみに他に誰か来るの？」

まるで、誰かが来るならば行く、と言いたげなユリアンの問いだった。

「今のところ決まってるのは俺とトーレンスだけ。ファ

ルネウスたちにも声かけようとは思ってるよ」

「どうしよつかなあ。行きたいんだけど、記録とか色々書かなきゃいけないのあるし、お風呂入っちゃたんだよね……。私は遠慮しておこうかな」

学院生の頃の自分なら、一緒に飲みに行ったであろうことを考えながら、ユリアンは答えた。学院生の頃と比べると、体力が落ちた。まだ仕事に慣れず疲れも溜まりやすいせいだろう。仕事に慣れてきたら、また飲みに行く体力も出てくるかもしれない。

ユリアンはフィニアへ顔を向けた。

「フィニアは行って来たら？」

「——実を言うと、私お酒強くないんです。私も遠慮しておきます」

それは残念だ。

「皆さんで楽しんでいってください」

エルダーは二人に手を振った。

「そっか。二人ともお休み」

「おやすみなさい」

「お疲れ様」

「お疲れ様です」

女性二人が部屋へ戻っていくのを見届けると、エルダーは肩をすくめた。

「残念だな」

「そうだな。女子がいないと華が無いし」

「いや、女子はまだいるじゃねえか」

トールレンスは今、自分がどのような表情をしているのか分からなかった。

「……ファルネウスさんのことか？」

「そう」

確かに、女子と言えば女子と言えるのかもしれないが、自分が言いたいことは何か違う。

しかし、トールレンスは考えるのを止めた。

「まあ、いや。とりあえずオーヴァルさんたちの部屋に行くか」

オーヴァルとアルレシヤが泊まる部屋は、エルダーたちがいる場所から数歩歩いた場所にある。

扉をノックすると、ややあつてオーヴァルが顔を出した。

オーヴァルはローブを脱ぎ、シャツ一枚の軽装だった。豪華な服を纏っていないくても、整った顔のおかげだろうか、オーヴァルは絵になる。

「良かった、オーヴァル起きてたんだな」

起きてた、と言うよりも、眠れなかったと言った方が適切なのだが。

「どうしたんだ？」

トールレンスが楽し気に笑う。

「実は、これから飲みに行こうって話になって」「オーヴァルも行かぬ？」

オーヴァルは唇の前で人差し指を立てた。

「少し声を抑えてくれ。アルレシヤは寝てるんだ」

楽しそうな、いかにも自由な学生らしい表情のトールレンスを見ると、心がざわめいた。

昔の自分は、おそらく彼と同じような笑みを浮かべていたのだろう。しかし、自分は二度と学院生のような時間には取れないし、心の底から笑うことは無いように思える。

オーヴァルはトールレンスのことは好きになれなかった。それが妬みからきていることも、オーヴァルは分かっていた。

「私は止めておくよ。君たちで楽しんできたまえ」

「そっか。じゃあ、おやすみ」

オーヴァルたちの部屋から離れると、エルダーは後頭部で両手を組んだ。

「思ったより人数集まらなかったな。あとはファルネウスか」

ファルネウスは一人部屋だ。

部屋の扉を叩くと、ファルネウスはすぐに顔を出した。

「あら、どうしたの？」

「これから飲みに行かぬ？」

「俺とエルダーだけですけど」「いいわね！」
それからファルネウスは笑みを消した。

「あ、でも奢らないわよ」

エルダーたちは、宿からさほど歩かない距離にある酒場に入った。

適当に酒を頼むと、トーレンスは口を開いた。

「役人二人は置いといて、皆さんはどういった経緯で仲間になったんですか？」

エルダーはフォルネウスと顔を見合わせた。

「オーヴァルは、売春宿に連れて行かれそうになったところを、助けてもらったのがきっかけだな」

「売春宿って水戸？」

「ああ」

「交易所の近くか」

エルダーはギョツとして、目の前の美しい男を見た。「何、お前行ったことあるの？ 恋人には困らなさそうなのに」

「ないよ。俺は、行ったことないけど茨学生なら大体の奴が知ってる話だよ」

だからオーヴァルもエルダーが連れていかれそうになつて居る場所が、売春宿だと知っていたのか。

「そうなのか。学院生ってけっこう遊んでるんだな。あと、恋人に困らなさそう、ってこと否定しなかったのムカつく」

「一言多いなお前は。俺今は彼女いないよ」

「へー」

エルダーはさほど興味なさそうに相槌を打った。昔はいたってことか。やっぱりムカつく。

「ファルネウスさんはいつから仲間になったんです？」

「私は、魔物を倒すのに加勢したことがきっかけで仲間になったわ。ひたちなかに入る直前だったかしら」

「そうだな。——で、フィニアは魔物にやられて死にかけていた俺たちを、回復してくれたんだよ。それが縁で、勝田の交易所でバツタリ会った時に仲間になったんだ」

「ふーん。じゃあ、皆昔からの付き合い、って訳じゃないんだな」

トーレンスとしては、純粹な疑問として仲間になったきっかけを聞いたのだが、エルダーは何を勘違いしたのか、笑顔でトーレンスの肩を叩いてきた。

「だから、トーレンスも気にすんなよ！ 皆これから仲良くなっていこうぜ！」

「別に、一番遅く加入したから疎外感感じてたわけじゃないんだけど」

注文した酒が運ばれてきた。

乾杯の音頭はトーレンスがとった。

「お疲れー！」

慣れているかのような、自然な流れだった。

経済的な理由のために学院に行くことができなかったエルダーは、学院生を羨ましく思った。

トーレンスは、髪を根本からきつちり縛るのではなく、ゆとりをもって縛っている。垂れた前髪と、ゆとりをもつてしぼられた髪が、彼の美しい顔を引き立たせている。「そういえば、トーレンスは何で髪を伸ばしてるんだ？」果物が入っている甘い酒を飲みこむと、トーレンスは自分の髪を触った。

「学生の時にしかできないことってあるだろ？ こんな長い髪型、社会に出たらできねえじゃん」

つまり、今しかできないから、髪を伸ばしているということか。

突如、近くにいた他の客が、こちらを見ながら嘲るように笑った。

「おい、見ろよ！ 男女がいるって噂本当だったんだな！」

「うわ、本当だ。アイツ化粧してるけど、男じゃねえか」
ファルネウスの顔が強張った。ファルネウスのことを言っているのは明らかだった。

エルダーは、不躰な言動をしてきた輩を睨みつけた。「何だよ、お前ら」

トーレンスも眉根を寄せ、不快感を露わにしている。「お前らさー」

不躰なことを言ってきた男は、卑下な笑みをニタニタと浮かべた。

「コイツのこと抱いてやったの？」

途端、トーレンスが男の胸ぐらを掴まんと、立ち上がった。しかし、トーレンスの腕は、ファルネウスによって押さえられた。

ファルネウスはトーレンスに耳打ちした。「止めなさい、アンタ役人になるんでしょ」

ファルネウスの言わんとしていることが分かり、トーレンスは動きを止めた。

本当は目の前の男を殴ってやりたいが、問題を起せば役人になる夢が絶たれる恐れがある。

トーレンスは、力なく椅子に座った。「よく見りやお前も、男じゃん。男のくせに長髪にして、お前ら男女だらけじゃねえか」

トーレンスは怒りに任せて男を睨みつけた。

エルダーにいたっては臨戦態勢だ。ファルネウスはエルダーの腕をつかむと、そのまま会計場所へ引っ張っていく。

「——行くわよ」
「えっ、おい！」

エルダーはファルネウスの腕を振りほどこうとするが、彼の手は力強く、いくら動かしても、びくともしない。

ファルネウスは三人分の会計を済まし、足早に酒場を後にした。

少し遅れて追いついたトーレンスは、ファルネウスに

謝った。

「すいません、俺が飲みに行こうって言ったから」

「アンタのせいじゃないわよ」

そうは言いつつも、沸騰する湯のように、怒りが沸き上がってきている。ファルネウスは、今すぐにでも物に当たり散らしたい気分だ。

「言われっぱなしで良かったのかよ？」

エルダーは不満そうだ。

「エルダー、アンタの気持ちは嬉しいけどね、どれ程ムカつくこと言われても、その度に食って掛かるのは子供がすることよ」

「子供……!!」

怒りの矛先が、ファルネウスにも向きかけていることに、エルダーは気づいていない。

「考えてみなさい。あの時、アンタが怒りに任せてあいつらに突っ掛かったら乱闘騒ぎになったわよ。周囲の關係ない人まで巻き込む可能性があるの。——ああいう時は、黙っていた方が、賢いのよ」

ファルネウスの声は落ち着いていた。まるで、自分に言い聞かせるかのような言い方だった。

その時、魔物が現れた。豚と鬼を合体させたような顔に、強靱そうな身体。今までの魔物とは一戦を画すほど強いことを表していた。

トーレンスは槍を構えた。むしゃくしゃした気持ちを、

この魔物に叩き込もう。

「丁度良い。俺、すげーイラついてんだ。相手してやるよ」

ファルネウスも矢をつがえ、エルダーも剣を鞘から抜いた。

血で血を洗うような激闘は、約二分で終わった。

血が上っていたせいか、三人ともほとんど怪我をせず、倒すことができた。

エルダーは剣を収めるとポーションを飲んだ。かすり傷しか負ってないが。

「強かったな」

「ああ」

苛立ちを魔物にぶつけたおかげか、先ほどよりは昂った感情が治まってきた。

「アンタたち怪我は大丈夫？」

「かすり傷だけ」

「俺もです」

「良かった」

ファルネウスはやっと笑みを浮かべた。

「私、これから湯屋に行こうと思うの」

「え。そろそろ閉店時間なんじゃね？」

「良いのよ。そっちの方が人もほとんどいないだろうし」
ファルネウスが、人が少ない時間帯に湯屋に行く理由

が、エルダーとトールレンスは何となくだが分かった。「じゃあ、私は行くから。アンタたちは飲みなおすなり、宿に戻るなりしなさいね」

そう言うと、ファルネウスは湯屋の方向へ歩き出した。湯屋は酒場を過ぎた場所にある。

酒場を抜けると、灯りがほとんど届かず辺りは真っ暗だ。

なるべく早くその場から立ち去りたく、ファルネウスは足を速めた。

「おゝい姉ちゃん」

近くに酔っ払いがいるのが、暗がりの中、見えた。

ファルネウスは酔っ払いを一瞥し、普段より低い声を出した。

「他を当たんなさい。私は男よ」

自分の性別を勘違いしたために声をかけてきたのだと思っただけ、酔っ払いはファルネウスの肩を掴んだ。

「分かかって声かけたんだよ」

それを聞いた瞬間、ぞわりと鳥肌が立った。

しまった。一人で行動するべきじゃなかった。

男は卑しい笑みを浮かべながら、ファルネウスに近づいた。

「お前、男が足りてねえんじゃないの？俺が相手してやるるか」

男はファルネウスの太ももに触れた。心が芯から冷え

切る思いがしたが、ファルネウスは太ももを這う男の腕を捻り上げた。

「いてててて!!」

ファルネウスは腕をつかんだまま、男の背中へ回り込んだ。無理矢理変な方向へ捻られた男の腕は、これ以上力を込めて押さえつけられれば、折れるはずだ。

「汚い手で触らないで。——テメエの腕折ってやりましょうか」

「分かった、分かったから!」

男が降参の声を上げたところで、ファルネウスは男の腕を離した。

男はその隙を逃さなかった。

「大人しくしろや、この男女!」

ファルネウスは、咄嗟に顔を右へ動かすと、男の拳を避けた。避けられ行き場を失った男の腕を掴むと、そのまま腕の下に自身の肩を滑り込ませた。男の攻撃してきた勢いを利用し、背中から男を地面に投げつけた。

「くっはあ……!」

男が痛みを苦しむのを一瞬確認すると、後ろを振り向く暇もなく、何かにとりつかれたように、一心不乱に駆けた。

男が追いかけてこないとは限らない。とにかく、人がいる場所に行かなければ。

酒場に戻ると、安堵のあまり、足が震えた。

周囲に人がいる安心な場所で、ようやくファルネウスは後ろを振り向くことができた。

男の姿は見えない。

ファルネウスは再び足を踏み出すと、宿へと走った。宿が見えてきたとき、宿の前に誰かがいるのが見えた。宿の灯りに照らされた人物は、学者のような身なりの良性格好、暗がりでも分かる端正な顔をしている。

仲間の姿を認めると、どっと疲れが襲ってきた。

オーヴァルはファルネウスの様子に気づくと、足早に近寄った。

「……大丈夫か」

ファルネウスは、継り付くような目を、オーヴァルに向けた。

「色々言われるのを覚悟して、この格好をしているのに。……覚悟はしていたはずなのに」

堰を切ったように思いがあふれてきた。

「人からとやかく言われたり、されたりする筋合いはないのに。私は……人に迷惑をかけてないのに」

これ以上声を出すと、涙も出てきそうで、ファルネウスは口を噤んだ。

「辛かったな」

辛かった。——そうだ、自分は辛かったのだ。辛くて悔しい。

オーヴァルは立ち去る気配がない。

「どこかに行く途中だったんじゃないの？ 私のことは気にしないで……」

「まだ街並みを見ていたいからね、ここにいるよ」

ファルネウスは、顔を伏せながらオーヴァルの腕を掴んだ。

「これ以上ここに居ると、私、アンタに甘えてしまうわ」

「私は構わないよ」

今度こそ駄目だった。視界が滲んでぼやける。

オーヴァルが視線を海に向けていることが、分かった。敢えてファルネウスを見ないようにしている彼の優しさが、胸に染み込んだ。

必死に涙を堪え、呼吸を整える。

ファルネウスが顔を上げると、オーヴァルも視線をファルネウスに移した。

「何があったんだ？」

「ちよつとね……酔っ払いに絡まれて」

途端にオーヴァルの表情が強張った。

オーヴァルの表情を見て、ファルネウスは慌てて言った。

「大丈夫よ、撃退してやったから」

「怪我はしていないか？」

「——ええ」

「それなら良かった」

オーヴァルはファルネウスの肩を優しく叩いた。その

優しげな美しい顔に、ファルネウスの視線は釘付けになった。まるで、何か魔法にかかったように、オーヴァルの顔から目が離せない。

彼の顔なら見飽きることがないだろう。

「ありがとう」

「さあ、宿に戻ろう。——それとも、どこかに行く予定だったかい？」

オーヴァルは、ファルネウスと足をそろえた。

もう湯屋も閉まつてしまふだろうし、何より男がいた場所に戻りたくなかった。

「——大丈夫よ。宿に戻るわ。それより良いの？ どこかへ行こうとしていたんじゃないの？」

「実を言うと、眠れなくて夜風に当たりに来ただけなんだ」

そう答える彼の顔は、どこか寂しげだった。

翌朝、エルダーたちは昨晚のことを、アルレシヤに話した。

ファルネウスは仲間たちを心配させたくなく、湯屋に向かう途中で起こったことは話さなかった。

話を聞きながら、アルレシヤは頭に血が上るのを感じた。人の見た目を揶揄するようなことを言うとは、どのような神経をしているのか。

「卑劣な奴らだな」

「だよな。今度同じようなこと言ってきたら、今度は力づくでも黙らせてやる」

若者らしい、血の気の多いエルダーの発言を聞き、アルレシヤは不安を覚えた。

「で、お前たち騒ぎは起こしてないだろうな？」

「起こしてないですよ」

「そうだな、お前は役人志望らしいし、揉め事は起こさない方がいいな」

アルレシヤはエルダーに視線を移した。

「エルダー、相手から力づくで危害を加えられない限り、相手に食ってかかるな」

「何でだよ」

「相手の挑発に乗るせいで、余計に被害が拡大することもあるんだ。例えば、乱闘騒ぎになって周囲の人に怪我をさせるかもしれない、恨みを買って自分ではなく、仲間の誰かが狙われるかもしれない。そういったことを防ぐためにも、簡単に相手に突つかかるな」

アルレシヤが言わんとすることは、分かる。ファルネウスも同じことを言っていた。

「でもさ、仲間が悪く言われてるのに黙ってろって言うのかよ」

納得していないことを隠そうともしない、エルダーの様子を見て、アルレシヤは苦笑した。

「そこはお前の良い所だな」

「え」

「仲間のために怒る所だ。——歳を取れば取るほど、出来なくなることもあるんだよ」

最後はまるで、独り言のようだった。それでも、アルレシヤが言いたいことは、役人になって間もないユリアンにも分かった。

「今後も同様なことがあったら、教えてくれ」

続けて、アルレシヤは部下に指示を出した。

「ユリアン、今回のことを記録に残しておけ。時間があるときで良いから」

自分でやればいいじゃん、と思ったが、ユリアンは素直にうなずいた。

「分かりました」

「とりあえず、魔物退治に行こう。交易所方面へ向かうか」

アルレシヤがそう言うと、各々歩き出した。

魔物が出没し始めたなら、話す時間が無くなる。

ファルネウスは他の者には聞こえないよう、アルレシヤに耳打ちした。

「アルレシヤ、良いかしら？」

他の者には聞かれたくない話であろうことが、ファルネウスの様子から分かった。

アルレシヤは低い声で尋ねた。

「何だ？」

「私、皆と一緒にいない方が良いんじゃないかしら……？」

声が段々と小さくなっていった。ファルネウスの戸惑いや不安が伝わってくる。

「お前は何も悪いことはしてないじゃないか」
アルレシヤは言い切った。

「でも、私がいると変な奴らに絡まれる可能性があるし、このパーティーには女性もいるのに、あの子たちに危害が加えられたら……」

女性のことまで考えられるのは、ファルネウスの優れたところだった。男性と女性、どちらの視点でも物事を見るのが、ファルネウスはできた。

「おいおい、俺は部下や住人を守れないほど柔に見えるか？」

アルレシヤの言葉に、ファルネウスは目を丸くした。

「え」

「そんな奴ら、俺がこのパーティーにいる限り、捻り潰してやる。だから、お前は安心してくれ」

アルレシヤならば、本当に相手の頭蓋骨を捻り潰せるような気がする。

温かいものに触れた感じがした。

思わずファルネウスに笑みが浮かんだ。

「ありがとう」

「こちらこそ、魔物討伐に協力してくれて、ありがとう」

交易所近くの魔物が出没しているあたりに来ても、魔物は姿を見せなかった。

「なんか、魔物の数少なくなってるね？」

エルダーの言う通り、今日はまだ魔物に出くわしていない。

フィニアも首を傾げる。

「どうしたんでしょう？ 誰かが親玉を倒してくれたのでしょうか？」

エルダーは嬉しそうに笑った。

「そうかもしれないな。ひとまず那珂湊は、もう大丈夫なんじゃない？」

エルダーたちは、昨夜戦った魔物が親玉だったと気付いていない。

オーヴァルはフィニアへ視線を向けた。

「じゃあ、フィニアの用事を済ませるとしよう」

「次はひたち海浜公園ですね」

ユリアンはその実、ひたち海浜公園へ行くのが楽しみだった。今はコキアが真っ赤に色づいている頃だ。

アルレシヤは、ひたち海浜公園までの道のりを思い出していた。

「ここから歩いていけなくはないが、一時間以上はかかるだろうな」

「一旦勝田交易所まで戻って馬車で向かった方が体力は

温存できますね」

フィニアは馬車を使うことを提案した。フィニアは長距離を歩くことに慣れていない。

「じゃあ、那珂湊交易所に行こう」

エルダーは冒険者なだけあって、長時間歩くことにも慣れていますが、フィニアの提案に賛同した。

那珂湊交易所に着いてさほど経たずに馬車が来た。

有蓋荷車に馬が二頭ついている型の馬車だ。

荷車の上で揺られながら、エルダーたちは談笑していた。

「魔物だ……!!」

御者の方から悲鳴が聞こえた。

エルダーは咄嗟に剣を鞘から抜くと、荷車を飛び出した。

「くらえええ！」

エルダーは飛びかかってきていたヒラメの形をしたヒラメンを縦に切り裂いた。

三十体ほどの魔物が馬車を取り囲んでいる。オーヴァルも荷車から身を乗り出すと、魔導書を開いた。

「イグニートスファイア！」

オーヴァルも全体攻撃の高位魔法を放った。複数体の魔物が炎に包まれ消滅した。

アルレシヤは踊り、仲間の戦闘を助ける。
「スターダストアロー！」

フィンアが詠唱すると、光の矢が出現し魔物を貫いた。
荷車に乗っていた他の客も、魔物討伐に来た冒険者の
ようで、武器を手に荷車から降りていった。

全員荷車から降りて各々魔物を倒し始めたとき、コキ
アの形をしたコキアン（緑色タイプ）が荷車に突進して
きた。

各々目の前の魔物との戦いに集中していたため、誰も
荷車に攻撃してきたコキアンを止めることができなかつ
た。

荷車の側面部分が壊れ、破片が飛び散った。その衝撃

で馬が驚き、嘶いないた。

馬は魔物を蹴散らせながら駆けていった。

幸い、鎮める者がいなくても、馬は落ち着きを取り戻
したのか、しばらく魔物を蹴散らすと、御者の近くへ戻
つてきて足を止めた。

その頃には、馬車を囲んでいた魔物も倒されていた。

「大丈夫ですか？」

アルレシヤは馬車の御者に駆け寄った。

御者はどうするべきか分からないような困惑した表情
を見せた。

「俺は怪我してないけど、馬車が……」

幸い馬は生きています。

「東石川の役所に向かってください。魔物討伐係に行つ
て、今回の被害を申告してください」

「わ、分かりました」

ユリアンは馬車に乗っていた、他の冒険者に声をかけ
ている。

「怪我はないですか？」

声をかけられた女性は、頷いた。

女性の仲間と思われる冒険者たちも大丈夫だ、と答え
た。

フィンアは残念そうに肩を落とした。

「海浜公園まで歩いて行かなきゃいけないですね」

「ここはどこだろう？」

水戸出身のオーヴアルは、ひたちなかの地理に詳しい
わけではない。

アルレシヤは周囲の景色を確認した。王宮騎士団の駐
屯地が見える。

「王宮騎士団の駐屯地がある。……勝倉か」

アルレシヤは努めて明るく言った。

「勝田交易所からひたち海浜公園間の馬車はまだ機能し
ているかもしれないし、勝田交易所までそう遠くない。
頑張ろう」

勝田交易所に着いたのは、約四十分後のことだった。

いくら待っても馬車が来ない。

フィニアの顔が不安で曇る。

「もしかして、何かあったのでしょうか？」

馬車の待合場所の近くを、二人組の男性が通りかかった。エルダーたちの姿を認めると、男性は声をかけてきた。

見たところ、ユリアンと同じ服をデザインの服を着ている。

「その馬車は来ませんよ。馬渡の方で魔物に襲撃されて馬車が壊されたんです」

「何だって!？」

アルレシヤは声をかけてきた男に詰め寄った。服装から相手も役人だと分かったが見たところ、アルレシヤよりも年下のはずだ。

「被害の状況は？」

声をかけてきた男性と一緒にいた役人が答えた。

「怪我人が出ましたので、ザサ教の神官に手当てしていただきました。被害状況の報告はパーティーについていた自分たちがしましたので、大丈夫です」

男性はアルレシヤが役人だと確信はなかったが、消去法でアルレシヤが役人だろうと推測した。何故腕や腹部が露になった踊り子の格好をしているかは分からないが、「それで、君たちがついていてパーティーのメンバーはどうしたんだ？」

「駆け出しの冒険者だったのか、魔物襲撃で戦意を失ったようでした……。水戸に行きました」

「これから自分たちも庁舎に戻る予定です」

役人二人は報告し終えると、役所方面へ歩いて行った。

「馬渡というと、海浜公園に行く途中に通るわね」

「そうだな。——念のため馬渡の方も見ていきたい。皆、今日は馬渡までは行こう！」

アルレシヤはそれから、申し訳なさそうにフィニアに告げた。

「すまん、フィニア。場合によっては今日中に海浜公園へ行けないかもしれない」

「大丈夫です。私のことは気にしないでください」

馬渡は、勝田交易所からひたち海浜公園方向へまっすぐ歩いていくと、たどり着く。

一時間ほど歩いていると、馬車の荷車らしき残骸が道の片隅に置かれているのが見えた。

馬は御者が回収したのか、姿は見えない。

トールレンスは呟いた。

「こちら辺で襲撃されたんですね」

では、ここが馬渡なのか。

「どりあえずこの辺を歩いてみて、魔物の数を確かめよう」

オーヴアルの提案で、馬渡の街中を歩いているが、魔

物と戦うことになったのは、今のところ一回だけだ。

「何かここは魔物の数少ないか？」

エルダーの言うとおり、馬渡の魔物の数は、一時期の那珂湊や東石川と比べると、魔物の姿はまだ見ていない。

「親玉は倒されてるみたいだな」

「じゃあ、今度こそひたち海浜公園ですね」

役人二人が続けて言うのと、フィニアは、おずおずと手を上げた。

「すみません。私、そろそろ休憩したいです」

よく考えてみれば、もうお昼時だ。魔物と戦い、長時間歩いているのだ。休憩を挟むべきだろう。

「そうだな。昼餉を食べるついでに休もうか」

「じゃあ、せっかくなら、ひたちなかの名物が食べたいです」

そう言ったのはトーレンスだ。彼は、茨城にいる学生のうちに、茨城を堪能したいと考えている。

「それなら……スタミナラーメンとかどう？」

エルダーはオーヴアルから聞いた話を思い出していた。「スタミナラーメンって……。レバーが乗ったラーメンだっけ？」

「そう。ひたちなかはスタミナラーメン発祥の地って言われているのよ」

「さっきスタミナン倒したときから、食べてみたいとは思ってたんだよね。俺はスタミナラーメン食べたいな」

反対する者もいなかったため、昼餉はスタミナラーメンに決まった。

カボチャやニンジンなどの野菜とレバーが熟々の甘辛い餡に絡まっている。レバーと野菜だけで食べても旨いが、麺と一緒に食べるとスープも一緒に絡んで、さらに美味しくなる。

「レバーの独特な風味が旨いよな」

エルダーはスープもすすってみた。スープは醤油味だ。トーレンスは少し困ったように笑った。

「でも、米が欲しくなるなあ」

「私もスタミナラーメン食べるのは初めてなんだ」

フィニアが意外そうな顔をする。

「あれ、そうだったんですか？」

「ああ。レバーが乗ったラーメンというのは聞いていたんだけど」

全員が食べ終わるのを待ち、アルレシヤは口を開いた。

「これからのことだが、俺としては今日中に海浜公園へ行くべきだと思う。そして、今夜は馬渡に泊まるう」

「ちなみに、ここからひたち海浜公園ってどのくらいかかるんだ？」

「一時間もかからないはずだよ」

フィニアも頷いた。

「そうですね……。今日中に行けるなら、行ってしまいたいです。でも、海浜公園に行く前に、市場で装備など

の買い物をした方が良いと思うんです」

「市場？」

エルダーの問いにはファルネウスが答えた。

「海浜公園の近くに市場があるのよ。すつごく規模が大きくてお店も品物も一杯あるの」

「そうだな。あそこに行けば何でも揃う」

それからアルレシヤはトーレンスとユリアンの武器を見た。

「お前たちは、もつと質の良い武器を買った方が良いぞ」

二人の武器は、那珂湊の小さな交易所で手に入れた。

「そうですね。俺も、もつと威力の高い武器が欲しいとは思っていたんです。皆さんが良ければ、その市場に寄りたいですね」

ひたち海浜公園の近くにある市場は、本当に様々な店が並んでいる。

服や魔導書、アクセサリや食料など。本当に何でも揃いそうだ。

各々買い物が終わったら、メインゲートに集合するところになっている。

ユリアンはトーレンスと武器屋を巡っている。

ユリアンが、あくびしているのが横目で見えた。

「お疲れですか？」

トーレンスはハルバートを手に取っている。——自分

にこれを扱うほどの技術は、まだ無いだろう。

「そうなのよ。毎日記録書をつけているから。しかも、公文書だから一つでも誤字があると、全部書き直しになっちゃうし……」

その時、ユリアンたちは仕事で自分たちのパーテイーについてきていることを思い出した。寝る前にも仕事があるとは。

「お疲れ様です」

トーレンスはユリアンの頭に、ポン、と手を置いた。途端にユリアンは、頬を染めた。

彼女の初々しい仕草に、トーレンスは目を丸くする。

「頭撫でただけじゃないですか。そこまで照れますか？」

トーレンスの指摘に、ユリアンは恥ずかし気に手を頬に添えた。

「私、頭撫でられたことほとんどないから。——恥ずかしいな」

彼女は白い肌を紅く染めながら、嬉しそうに笑った。トーレンスは息をするのも忘れて、ユリアンを見ていた。

この人は、こんなに可愛いんだ。

見惚れていたのは、ほんの一瞬のことだったのだろうが、トーレンスにとっては、その一瞬が長く感じた。

あまり長く撫でていては、ユリアンや周りから快く思われないうら。

トーレンスは、残念に思いながらも、ユリアンの頭から手を退けた。

女性の可愛らしさは見目だけでなく仕草や言葉でも変わるのだ。もちろん、ユリアンを見た目も可愛らしいが、時折見せる年下のような言動も、いじらしく思わせる。

ユリアンに彼氏はいるのだろうか。

ふいに、トーレンスはそのようなことを考えた。

「ユリアンさんって彼氏いますか？」

脈絡のない話題に一瞬戸惑いつつも、ユリアンは答えた。

「今はないわ。最近別れちゃったの」

そう答えるユリアンの顔は寂しげだった。

トーレンスは、自分がユリアンの答えに安堵していることに気づいていた。

オーヴァルはファルネウスと歩いていった。

「丁度矢が欲しかったのよね」

「私はポーションを買っておこうかな」

「薬屋はどこだったかしら……」

前方に人だかりができてるのが見えた。

人だかりに近づくにつれて、軽快な曲調の音楽が聞こえてきた。どうやら、音楽の演奏が行われているらしい。

流れている曲が何か分かった途端、オーヴァルは足を止めた。

「この曲——恋人と聞いたことがある」

オーヴァルは、この場にはいない、誰かを見ていた。

端正な顔立ちのオーヴァルのことだ、恋人がいるのだろうと、ファルネウスは思っていた。

ファルネウスは笑みを浮かべた。

「やっぱり恋人いるのね。アンタほど良い男、世の女性が放っておくわけがないわ」

しかし、オーヴァルの顔を見、ファルネウスは笑みを消した。

今まで見たことがないほど優しい目をしているのに、

彼の顔には哀しみの色が落ちていた。

「私には、学院生の頃恋人がいたんだ。彼女も、教師になった。——そして、私が教師になって三年目、彼女は、自ら命を絶った」

ファルネウスは息を吞んで、オーヴァルの顔を見た。

「私は、その後、何日か学校を休んでしまった。担任としてクラスを受け持っていたのに……。その後、職場に戻ってきた時には、同僚たちの私を見る目が変わっていた」

職場のことを思い出すと、胸に冷たいものが触れたように、身体の芯が冷える。

「何日も仕事を休みやがって、家族が亡くなった訳でもないのに、その間誰がクラスの面倒を見たのか、社会人としての責任が無い……。色んな陰口を言われた。後輩

海が見える丘で
第二部

もいたのに、雑用は私に押しつけられた」

話しているうちに、声が震えてきた。それは、哀しみのせいなのか、怒りのせいなのか。きつと、怒りのせいだ。哀しみのせいだと認めたくない。哀しみのせいだったら、自分あまりにも憐れだ。

二人の間に沈黙が流れた。

ファルネウスは何も言えなかった。何を言っても、正解だとは思えない。

翳のある人物だとは思っていたが、まさかそのような過去があったとは。

オーヴァルの目には、怒りと哀しみの色が浮かんでいた。哀しみの色の方が深かった。

「今まで頑張ったわね」

言葉が口から滑り出てきた。

オーヴァルは今の職場にいるべきではないように思えた。しかし、人生がかかったことなのだ、無責任に「教壇を降りろ」とは言えるはずがない。

ファルネウスはかける言葉が見つからなかった。

明るいメロデーを奏でながら、曲は続いている。

第二部 終幕